

第六十九回 コスモス賞

ハツカが香る

青森 佐々木佳子^{ささき よしこ}

右の通り贈ることを決定した。

令和四年八月

コスモス短歌会

佐々木佳子の作品について

佐々木佳子さんは一九六〇年、青森県弘前市に生まれ、現在も南津軽郡田舎館村に暮らす。コスモス入会は一九九八年。

水仙も梅も桜も連翹ももりもりと咲く津軽ふくらむ

氷点下5度にこぼれる涙あり頬に熱くて熱くて笑ふ

津軽という北の風土を愛情深く詠み、その土地に暮らす者ならではの眼差しが光る。一首目、「もりもりと咲く」に、一斉に咲く花の生命力が、結句の「ふくらむ」に、津軽の大地の春の喜びが捉えられている。二首目、厳しい寒さの中で感じる涙の熱さは、人間の命の源の熱さのようで、「笑ふ」にはマイナスをプラスに転換する心の強さを感じる。

しあはせは他人がはかるものでなくマスクの中にも微笑みはある

「春望」と重ねてわれも白髪ふえワクチン待てば夏至が近づく
充電のできるラジオを部屋に置き折り充たして十年がたつ

コロナ禍の日常や震災に纏わる歌であるが、独自の発想と、的

確な表現が冴える。一首目、マスク生活について世間的に言われることに惑わされずに、真っ直ぐに自分の思いを述べる。二首目、「国破れて山河在り」で始まる杜甫の五言律詩「春望」に、自らの白髪を重ねているが、コロナで一変した国の有り様も重なりあって、国を憂うる思いが深い。三首目、震災から十年という節目にあつて、四句の「折り充たして」に思いが籠もる。

数年に一度の暴風雪といふ 数年に一度の自分で何だらう

ひとつだけ人のひしめく星はありいつも何かと闘つてゐて

光年といふひとすぢが存在する星みあげればハツカが香る

一首目、上の句から下の句への飛躍が見事。二首目、この地球を外から、客観的に見つめる視野が広い。三首目、遙か遠い星に思いを馳せつつ「ハツカが香る」という、今ここを詠う。どれもスケールが大きい歌である。六十歳という節目の年を越え、さらなる飛躍が楽しみである。

ハツカが香る

第六十九回コスモス賞受賞作品

青森 佐々木佳子

立つたまま二秒で体温測られて診察までの時間は硬質

ここはたぶん未来の病院だれもかも言葉交はず眼だけが光る

ひとつだけ人のひしめく星はありいつも何かと闘つてゐて

ちちははの育てる木犀かをりたり今日の安堵をまあるくつつみ

日々暮らす平生へいぜいといふしあはせは蓮にころがる光の玉水

しあはせは他人がはかるものでなくマスクの中にも微笑みはある

あめ色に干されし柿をいただきぬ去年のひかりのぬくみ宿るを

雪上のけもの足あと途中にて折れをりそこがひらめきポイント

ウイルスと比べたら鬼はめんこいな豆は撒かずに夫といただく

数年に一度の暴風雪といふ 数年に一度の自分で何だらう

氷点下つづけど椿の芽は出でて亡き姑に会ひたくなりぬ

氷点下5度にこぼれる涙あり頬に熱くて熱くて笑ふ

充電のできるラジオを部屋に置き祈り充たして十年がたつ

腰をやむ私だけの椅子おきたればキッチンのみで暮らしていける

作者感想

「第六十九回コスモス賞」本当にありがとうございました。迷わず歌を詠みなさいと言われたようで心が震えました。

二十四年前、夫の父は自分の愛読書である岩波文庫『宮柊二歌集』を私にくれました。私を持つていた方がいいと。コスモス短歌会に入会してすぐのことです。今回の受賞を、今は亡き義父も喜んでいると思います。

どんな状況下でも続いていく日常に眼を凝らし、人を見つめて歌を詠んでいくつもりです。

コスモス短歌会の皆様、青森支部の皆様
に心から感謝いたします。

大根を煮る十五分キッチンノイスにまどろみ邯鄲の夢

わた雲の大きな影あり岩木嶺の萌黄ふくらむ五合目あたり

春はいま山の七合目にのぼり村内放送の音よく通る

ころなかをこころ笑ふ幼な子のマスクがずれてまたまた笑ふ

「春望」と重ねてわれも白髪ふえワクチン待てば夏至が近づく

「人流」はジュラルミン的硬さもつ耳にも目にも生ずる痛み

カツコウの声にのせられ全身で梅シロップの大瓶ゆらす

青梅と氷砂糖の密がいい 時の液化がゆるりとすすむ

夏雲と張り合ふやうにアーム伸ぶ新築すすむ父ゆく病院

医師話す関西弁がよどみなく父も私も晴れるものあり

サイタサイタ感染者数が今日最多あさがほの花夏にふるへる

ひまはりの二十五本が蕾もつ何はともあれ着実に夏

「太陽は五十億年後に果てる」一瞬われは途方にくれて

オーロラを見に行きたいといふ夢は一パーセントも諦めてゐない

オーロラをスマホの画面にくりひろげ心を放つ夏夕まぐれ

光年といふひとすぢが存在する星みあげればハッカが香る

作者略歴

一九六〇年 青森県弘前市生まれ
一九九八年 コスモス短歌会入会

住所 青森県南津軽郡田舎館村

